

■■■ 「多文化共生」を考える研修会2011 ■■■

今年も8月19日(金) から4日間、在日外国人の現状を知り、「多文化共生」を考える研修会を開催し、延べ363名の参加を得ました。

初日の講演者は、「貧困大国アメリカ」の著者である堤未果さんで、9.11以降のマイノリティの貧困状況についてお話しいただきました。9.11をきっかけに、アメリカでは同じ報道ばかりがされるようになり、管理政策推進(愛国者法成立)、軍事予算増加による社会保障費削減などにより、アメリカでは定職がない人が10人中6人、破産者は100万人/年と、従来言われてきた人種の格差を超えて、経済格差がますます広がっている状況だそうです。詳細は先生の著書をぜひお読み頂ければと思いますが、「愛国者法」など美しい名前のつく法律は疑うべきだ、人が立ち上がる時は、真実を知った時と、自分の持っているものにほこりを持った時である、という堤先生のお話が心に残りました。(志岐 良子)

第2日目、8月22日の「外国にルーツを持つ子どもへの教育」という講演に出席しました。午前中は、福山市立大学教授、田淵五十生先生の「イギリス多文化教育が日本の教育に示唆するもの」でした。先生は、26年間、今年の三月まで奈良教育大学で教鞭をとられ、日本社会の差別問題からスタートして、外国人教育の歩みを研究されてきた方です。奈良で、在日外国人保護者会を作り、合宿や研修を重ねてこられました。講演は、そこで書き綴られてきた子どもたちの作文を読んで、気づいたこと、学んだことを話し合い、発表するという作業から始まりました。

作文から、子どもたちは自分の意思ではなく親に連れて来られ、二つの文化の間で苦しんでいる姿が浮かび上がりました。先生は、「根きり状態」のように例えるとその根を伸ばすのは周囲の土壌次第。日本の文化にどう同化させるかではなく、その子どもの文化を大切にすること、多文化教育は複数の民族(文化)が融合する中で新しい地域社会や文化を創造すること、自分の文化を相対化することである。というイギリスの外国人教育変遷から学ばれたことを話されました。

午後は、「外国の子どものエンパワーメント～すたんどばいみーの子どもたちとの関わりから～」というタイトルで、東京理科大学准教授の清水睦美先生の講演でした。先生は教職の指導の中で、学校に興味をもたれ、学校と行政の関係、学校はどのようなところか、外国人の児童生徒がどのようにして育てているのかを学校を見学し、地域で調査、研究されました。そして、子どもたちが学校の教室でも、家族の中でも従属的な位置にあり、「生きにくい」という共通する現実突き当たり、その問題を掬い取る場として、神奈川県大和市で「すたんどばいみー」の立ち上げに関わられました。

「すたんどばいみー」とは「生きにくさ」を語る場で、生きにくいからいっしょにいる居場所なのです。ボランティアのための学習教室ではなく、外国人子どもたちの学習教室であり、子どもたちが自主的に企画、実行、したいことを形にしていく集団で、ボランティアの担っていたことを、子どもたちに移していき、ボランティアがそれを手伝い、並走していく教室を作られたのでした。そして、従属的位置から、主体性の獲得へと変わっていったのです。いろいろ問題もあったようですが、子どもたちの考えで、この場所が大切だからやはり必要だ、残そう、と、続いているということです。

両講師とも、社会構造の問題と繋がっている格差社会、弱者にどのように支援していけばよいか、熱い心で関わってこられたことを、熱く話して下さいました。(ニュース係 谷先 晴代)

8月26日（金）13：00～16：45の講座の前半は「生活としての外国人の日本語支援—外国人定着支援日本語システム」という題名で講師は群馬県生活文化国際課長補佐の太田祥一氏でした。後半の題名は「多文化共生と日本語教育—日本語教育にできることできないこと—」であり、講師は群馬県立女子大学准教授の伊藤健人氏でした。

太田先生は先ず群馬県という土地の説明をされました。出席者の私達には群馬県は北関東の一県という程度の認識しかないと思われたようでしたから。群馬県は静岡、愛知、三重県と共に外国人の多いところで、県内ではことに大泉町に外国人が多いのです。平成元年、バブル景気で仕事が多かった頃、移住者の二世、三世が少々言葉に難があっても、労働力として使えたので次々と来日したのが始まりなのです。

彼らは一ヶ所に固まって住み、そこで暮らしている以上、言葉は切実な問題ではなかったので先に見送られてきました。

次に先生は平成17年頃から今迄は地域のボランティアが主体となって行なってきた日本語教育を政府がとり上げるようになった歴史を行政の立場から話されました。

その問題点は①有料か無料か②学習者たちの継続③学習者達のニーズの把握（留学生のニーズとは当然異なる）④土地柄、ボランティアが多くないこと、定着しないことと言われました。

一方、ボランティア側からすれば仲間同士の意見の違い、彼らの熱意が学習者のニーズとの差から、から回りすること、地域にあわない既成の教材への不満があり、又、そのほか最近では口語、会話能力を伸ばすことに重点をおき始めていることもいわれてきました。それを聞いていずれも私たちにも共通なことがらと感じました。

次に後半の伊藤先生は具体的なお話しから始まり、先ず「みんなの日本語」をとり上げられました。

「今日は暑いですね」か「暑いですよ」かと問いかけられました。つづいて文法にこだわるのは避けること、教材をそのまま使うのではなく優先順位を頭において不要と思うところを飛ばす英断もあっていいのではないかと。又、学習者に知識として日本語を教えるだけでなく、かれらの生活習慣、文化等を理解しておくように、反対に日本のルール（ごみ出し）等も教えるようにとつけ加えられました。

更に先生は太田先生のように日本語支援にはボランティアの養成、場所の提供、予算など公的機関の協力も欲しいと違った立場から強調され、しめくくりとされました。まさに私達も同意することでした。

（ニュース係 気賀 倭文子）

多文化共生を考える研修会2011の最後、「在日コリアン起業の歴史と現場～地場のケミカル産業の変遷を通して～」という題名で話をされたのは大久ラバー株式会社専務取締役の金泰換氏でした。

神戸に永年在住しているコリアン達、神戸での彼らの多くの生活に関係を持ってきたのはゴム産業です。金氏のいわれるにはゴム産業は3K—汚い、危険、きつい仕事で、日本人はやらない仕事だったのです。ゴム産業は1907年にダンロップが脇の浜に工場建設をしたのが始まりでゴム産業は手工業でした。そのためか小さい工場の経営者がふえてきて、そういうところにコリアン達が集まりました。当時、又、零細産業としてはマッチ産業も請負い式で興り、コリアン達は出来高での給料に引かれ、ここにもあつまりました。その他、須磨迄貫通した省線の「土方」になった人もいました。

一方、ゴム産業は大東亜戦争後、ゴムの輸入制限もあり、衰退の道を歩むことになりました。いい時代にはコリアン達に工員募集をせよとかけ、大恐慌の時には彼らを邪魔者扱いにしてきた日本人もいました。

1950年代にケミカルシューズがゴム産業の主流となりました。このアイデアに韓国・朝鮮人も関係したといわれています。この後、1970年代から輸出が減って苦しい時期となり、さらに阪神大震災以降は、靴産業は形をかえましたが長田の町に息づいているのです。

金氏のお考えは一長田は弱いものの集まる町であってよい。最先端に行く、とりすました企業が来るより、誰でも働けるやさしい企業があり、うるおいのあるムードを作り出したい。色んな企業があつていいので画一化を目指すのではないということです。ある社長の「自分はたくさんの従業員を食べさせられる企業を作りたい」という理念をこの長田で生かしたいということばで結ばれました。

私たちが日本語支援をしている学習者の大部分が生活している長田の町、そこでの彼らの何人かの生活にかかわっているゴム産業の話や関係者の理念を聞くことができたことは、学習者の背景を少しばかり知りえたことになり、今後支援の参考にもなるし、又参考にしていきたいものです。（ニュース係 気賀 倭文子）

■■■KFC日本語プロジェクト■■■

◆KFC特別講座 「タスク積み上げ型日本語教育の理論と実践」に参加して

8月27日新長田勤労市民センターにて、群馬県日本語教育支援政策研究会の太田祥一さん、ヤンジョンヨンさん、森沙耶佳さんの三名の講師に地域の日本語教室に適した新しい方法「タスク積み上げ型」について、講義をして頂きました。

報告①

「タスク積み上げ型」とは、従来の文型を積み上げるものではなく、日常生活での課題(タスク)を積み上げていく方法です。特徴の一つとしては、文型を細切れにするのではなく、日常の行動を細切れにしていく方法です。例えば、「レストランで予約ができた」「再配達 of 荷物が受け取れた」などの比較的単純な言語行動を小さなタスクとし、それらを積み重ねることによって、最終的に「病院で診察が受けられた」などの複雑な言語行動を伴う大きなタスクへと繋げていきます。

また、もう一つの特徴としては、他の場面で何度も繰り返し出てくる重要な文型や表現を「キータスク」とし、複数の回に重複して散りばめるスパイラル方式を採用していることです。このスパイラル方式により、欠席した学習者や、日本語教室に途中から参加した学習者も、重要な文型や表現を落とすことなく学ぶ機会が持てます。

「タスク積み上げ型」というこの新しい日本語教育が、これから地域にどんな風を運ぶのか、大いに期待したいと思います。

(松本 茜)

はじめまして。この度、KFCが受託した神戸市の緊急雇用事業でお世話になることになりました。松本茜と申します。大学で日本語教育について学び、卒業後韓国で2年間、その後ブラジルで2年間、日本語教師として活動して参りました。日本語を通して、より安全で安心できる地域作りに貢献できればと考えております。どうぞ、宜しくお願い致します。

報告②

「タスク積み上げ型」のカリキュラム設定についてもお話がありました。

3カ月を1タームとして1回の授業は120分で10～12回の授業です。こまめに目標を設定することで学習者のモチベーションを常に高めておくことができると言われていました。

例えば「1～3回目までの学習を終えたら自分で目的地まで行って買い物ができる」など具体的なゴール設定をすることで学習者が日本語で日常生活を送ることができるようにカリキュラムが設定されていました。

また小さなタスクを積み上げていくことで場面が変わっても日本語で会話ができるようになっていきます。実際にヤン先生が作られたカリキュラムの最終回のゴールは「病院で診察を受ける」でしたが、それまでに「レストランを探す」「目的地まで行く」「ポイントカードを作る」「薬の説明を聞く」などのタスクがすでに習得されているため負担を感じることなく習得できます。学習者によって、日常生活に関する言葉・育児・仕事に関する言葉などニーズはさまざまですが、あらゆる場面で必要になる基本的な会話を少しずつ覚えていくことで、どんな学習者にも対応できるカリキュラムになっていると感じました。

(中野 みゆき)

今回、新しく「生活日本語教室」を開講することになり、お手伝いさせていただくことになりました。中野みゆきと申します。約3年半の社会人経験を経て中国に1年間日本語教師として赴任しました。よろしくお願いたします。

◆年齢の高い人への日本語支援

9月10日KFC研修会は、アスタくにつか4番館東棟4Fで、「年齢の高い人への日本語支援について」という講演でした。講師は、「神戸中国帰国者日本語教育ボランティア協会」の根津京子先生です。先生は、地下鉄「学園都市駅」ごく近くの「ユニバープラザ2階」で毎週月・水・金の昼間2時間に開かれている「外大ユニティ教室」で実際に日本語支援を実施されている日本語教師です。研修会参加者は会場いっぱい膨れ上がっていました。レポーターの私も今回の興味を惹く講演を受講させていただきました。概要を報告いたします。

「外大ユニティ教室」に来る学習者は、中国帰国者とその二世・三世で、日本に帰国して二十年を越える年齢の高い人が多い。生活保護を受けている人も多い。教育程度は人それぞれであるが、文字が書けない人も少なくない。こういう人々を対象にした日本語支援の在り方が、この日の話である。

中国帰国者たちが帰国後すぐに世話になるところは、「中国帰国者定着促進センター」である。ここで四ヶ月間、日本語教育などを受ける。このセンターのホームページは、キーワード「同声同気」で検索すると探し出すことができる。このホームページには日本語支援教材の紹介もされているので参考にするとよい。

「中国帰国者定着促進センター」で四ヶ月学習した後、各都道府県に配置されている「中国帰国者自立研修センター」に移動することになっていたが、必要性がなくなってきた現在はほとんど閉所状態となっている。

文字の書けない人がどのように日本語を習得してきたのか興味のあるところである。相談を受けた日本語支援ボランティアが物事を絵として描き、それにひらがなを追記したところ、成功したという。

文字が書けない人であってもひらがなの導入は比較的容易。しかし、ひらがなはその発音と厳密につながっているのか疑問もある。例えば、中国語話者には難しい清音と濁音の区別。「ん」の発音が、前後の音声につれて3種類の異なった発音があること、などなど。

教室を開いた当初は教材として「みんなの日本語」を使ったが、学習者の興味をひかないので3回で断念。学習者が興味を示すのは文の構造(文法)ではなく文の中味であることに気づき、タスク中心の教室に切り替えようとした。

具体的にいうと、「なくした傘の探し方」をタスクにしようとして教材を準備して授業を始めたところ、「私は傘なんか探しません。百円ショップで買えばいい。」などと興味が拡散して、中国語での雑談会になっていきました。

童謡の練習は、有効なようである。イラストはパソコンで得ることができる。

教材選びにはいつも苦労している。

最近の「外大ユニティ教室」は、毎週月・水・金の昼間2時間に開かれており、学習者数は1回あたり平均32人、支援ボランティア数は平均二十名。大きな教室を学習者数名ずつの小グループに分けてグループ学習している。

一言でいうと「外大ユニティ教室」は「盛況」だと思います。なぜ盛況を維持できているのか、レポーターの推測ですが、高齢の学習者の望むところをよく把握され、それを満たすため教材作りなどにご努力を惜しまずなさっているからではないか、と改めて思いました。(ニュース係 操田 誠)

◆生活日本語教室

9月5日(月曜日)から神戸市北区にある北区民センターで「生活日本語教室」を開講します。神戸市からの委託事業で、神戸市にお住まいの外国人の方を対象とした入門～初級レベルの教室です。従来までの文法積上げ型ではなく、より実際の生活に生かすことができる内容にするため「タスク(課題)積上げ型」という今までにはない新しい方法で講座を進めていく予定です。例えば目的地へ行き自宅へ帰るまでにどんな日本語が必要になるか、どんな行動をとるか。それらを授業に組み込んでいきます。受講生募集中！詳細を知りたい方は事務所にチラシを用意していますので、ご自由にどうぞ！

■■■KFC外国にルーツを持つ子どもの学習支援■■■

◆夏のお楽しみ交流会

8月24日(水)に神戸市立地域人材支援センター(旧二葉小学校)で、夏のお楽しみ交流会を開催しました。

今回の交流会の内容は、みんなで意見を出し合って決めました。男の子、女の子問わず小学生に人気なのは、ドッチボール。お昼ごはんはみんなでカレーを作ることに決めました。

みんなで旧二葉小に出発し、到着するなり早速、調理開始です。少しスパシーなチキンカレーに挑戦！中学生や高学年のお兄さん、お姉さんが中心になってテキパキと調理が進みます。包丁さばきもなかなかです。ただタマネギを切ったときの目の痛さには、誰もかかないません。ポロポロと涙が流れてくるので、お互いの泣き顔を見合わせて大笑いでした。目をていねいに洗ったり、水を飲んだり、大声を出したりと、それぞれのユニークな対処法で乗り切りました。1時間ほどで特製チキンカレーは完成。付け合せの「はるさめサラダ」は、彩りも良く、とってもおいしかったです！私はおかわりもしました！

その後は、講堂に移動してバトミントンやかくれんぼ、キャッチボール、バレーボール・・・そしてお待ちかねのドッチボール。おとなも子どもも、みんな汗びっしょりになってスポーツを楽しみました。

メロン味とイチゴ味の綿菓子も大人気で、自分で作って、おみやげにもした人もいました。

普段、学習の時間や曜日のちがう学習者や支援者と出会って、またともだちの輪がひろがった一日でした。(藪田 直子)

■■■ KFC中国帰国者支援事業 ■■■

◆介護保険説明会について

8月23日、地元では夏休み最後のイベントの地蔵盆が開かれる日に中国帰国残留邦人帰国者等への介護保険の説明会を行いました。

事前に明石の福祉事務所で、中国残留邦人の支援相談員をされている有馬久美子さんと神戸で同じく支援相談員をされている有馬真理子さんとKFCスタッフとで打ち合わせを行いました。

初めに中国帰国者の方の医療や介護の保険給付の状況や仕組み等を教えて頂きました。支援給付という生活保護と同じような支援で、帰国者の方の生活が成り立っていることを知りました。

当日は、暑い中を一世二世の方30名くらい集まり、いつもより参加人数が多いと有馬さんから聞くと、一気に緊張感が高まりました。

介護保険の説明は絵を利用し、紙芝居の要領で行いました。まず、日本語で話し、その後、有馬さんが中国語で翻訳するという形です。なるべくゆっくりと話し、できるだけ、顔を上げて目を見て話すように心掛けました。真剣に聞いている姿が見えましたが、やはり有馬さんが中国語で説明して頂いている時の方が、うなずきも多く見られました。

説明会の後は頭の体操や質問コーナーを設け、その後、グループに分かれて、簡単なアンケートに記入してもらいました。

長寿といわれている日本の中では、まだ若く、比較的元気な60代、70代の方が、多かったのですが、現在、困っている事や将来の事とか話を聞いていると、病気や将来が不安だと言われていました。言葉の壁も有ると言われました。20数年前に日本に帰って来られ、今までも、そしてこれからも拭いきれない不安を取り除くことができるように、私もできるだけの支援をしていきたいと思えます。

(ハナ介護ケアマネージャー 松本 睦子)

■■■ ハナの会 ■■■

◆世代間の違い

子育てが一段落し、仕事に就くことになりましたが主に事務職を今までしてきました。

近年、今までとはまったく違う職種である「介護」の仕事に従事することになりました。

自分の祖母以外のお年寄りの方々とのおふれあいに何だか懐かしさを感じる事も日々多くあります。

私は、在日3世になります。民族教育は受けていないので言葉や文字の壁は大いにあります。言葉は、祖母がそばにいる環境で育ちましたので、何気なく聞いている事で何となく、こんな意味だろうという事がわかりました。だから聞いていて何を話しているかは多少わかります。自分の祖母達はもういないので、お年寄りと接し、話をすると日本語半分韓国語半分の会話の中で、生前祖母達が使っていた言葉が出てきたりすると、祖母達も「ああ、こんな言葉を使っていたなあ」と思い、懐かしくなります。

以前、お年寄りの方と会話をしている時、今はもう見なくなった洗濯の作業（大きな鍋みたいなものに白い洗濯物だけを入れ火にかけることや石の台を使って洗濯物を叩く事）や料理の話

(米のとぎ汁を料理に使う事) など、子どもの頃よく目にしていた光景が浮かんで来て、懐かしくなりました。

食事の面では日本のお年寄りと韓国のお年寄りの大きな違いを感じます。

韓国では、来客があると挨拶代りに、「ご飯たべたか?」とすぐ聞かれる様に、食べるという事を重んじる所があります。だからかも知れませんが、大変よく食べる方が多いと思いますし、そしてそれが、とても日々の活力になっているなあと思います。

そして、本当によくおしゃべりをします。おしゃべりを聞いていると、独特なしゃべり方があって、話の本筋をしゃべる前に、まず状況説明からはいるので必然的にどうしても話が長くなります。聞いている方は、それが結構おもしろかったです。

そんな自分でも、子どもたちから見ればとっくの昔に既に「おばさんの世代」に入っており、私が、日常何気なしに使っている言葉が全く通じず、子どもたちにはまったく意味不明な言葉になっており、驚きビックリさせられます。子どもたちには、また古代用語を使っていると言われます。

この様な状況がなぜ生まれるのかを考えると、ほとんどの家庭で核家族化が進み、子どもたちとお年寄りが接する事があまり無いので、受け継がれていく事がむずかしくなっていると思います。

既に社会人になっている年代のわが子たちですが、この世代ではもう通じ無くなっている言葉は、とても早いスピードで消えていってしまうんだろなあと考えさせられます。

若い人たちは、時間のかかる事に関しては、あまり労力を使わずパソコンや携帯などを日常を過ごしていると思います。わからない言葉があると、辞書で調べる事はまずしません。いつも手元に置いてある携帯でさっさと調べてしまいます。それがいいのか悪いのかはわかりませんが、とても違和感を感じてしまいます。これって、時代について行っていないという事かもしれませんね。 (金松 恵)

■■■ 今後の予定 ■■■

■ 研修会

「生活のための基本語彙とは」

10月8日 (土) 13:30~15:30

神吉宇一 ((財) 海外技術者研修協会AOTS日本語教育センターグループ担当長 兼 上席日本語専門職)

於 アスタくにつか4番館東棟4F

「ベトナム人を理解する」

11月12日 (土) 13:30~15:30

川越道子 (大阪大学文学研究科招へい研究員)

於 アスタくにつか4番館東棟4F

■ 日本語Pお弁当ミーティング

10月5日 (水) 12:00~ 於 KFC事務所

■ 日本語ボランティア講座 (初心者コース)

9月3日 (土) ~2011年10月22日 (土) 10:00~12:30 全8回